

ボランティアから法人設立へ！ 社会を動かした“つながり”のチカラ

—『社会福祉法人 エゼル福祉会』—

名古屋市西区中小田井を拠点に活動している「エゼル福祉会」。“障害があっても住み慣れた街で暮らしたい”という障害者の想いを叶えるため、生活支援と日中活動支援をメインにさまざまな事業を行っています。今回は理事長の大川美知子さんに、ボランティアから法人を立ち上げた際に発揮された“つながり”の力についてお話をうかがいました。

ガマンして暮らしている障害者の親を助けたい

「活動を始めたきっかけは『なんかおかしいよね?』という疑問からでした」。今年で20年目を迎える支援活動を振り返って、大川さんはそう話す。現在は生活介護や居宅介護、相談支援など幅広い事業を行っているエゼル福祉会だが、最初に取り組んだのは「コンビニハウス」というレスパイトサービス施設の運営だ。介護を要する障害者を一時的に預かって、家族の負担を軽くする援助サービス。大川さんは自身が障害を持つ子どもの親であったため、コンビニエンスストアのように24時間使える障害福祉サービスの必要性を肌で感じていたそう。

「親戚の法事がある時や、同窓会への誘いかけがあった時、子どもを置いていかなければいけないので参加できない。また、体調を崩してしまった時、頼れる人や場所が近くにないことがある。いろいろなものを我慢して暮らしているのってなんだかおかしいよね?と思ったので、同じ境遇のお母さんたちや学生ボランティアを募って活動を始めました」。20年前は、障害者に対する福祉サービスがまだまだ充実していない時代。そのため、有志のボランティアたちが一から作り上げるようになったのだ。

試行錯誤を繰り返した後、社会福祉法人設立へ

たまたま一軒家を無償で貸して下さる方と出会ったことから、そこを拠点に開所したコンビニハウス。当初は民宿のような形態で行っていたそうで、学生ボランティアがたくさん集まっていたそう。「今は障害者の方1人に対して職員1人がついて介助していますが、当時は学生が主に介助していたので1人につき3人もついていました。小さな部屋に収まりきれないくらいの人数がいて、とにかく賑やかでした」と話す大川さん。学生たちは福祉の専門家ではなかったため、勉強会を開くなどして介助の仕方を身につけていったそう。勉強会には福祉大学の先生や他施設の職員の方も講師として参加。「志のある人たちを応援したいと言って下さり、今でも感謝しています」。

コンビニハウスはその後、第二の拠点を開き活動を広げて、NPO法人格を取得。活動内容に共感して支援してくれる方々も増えていった。お金のやりくりに困った際も、参加者や支援者が寄付でサポート。「拠点となる土地・建物を購入した時も銀行がそのサポーターの多さから“これは必要な事業だ”と判断、融資をしてもらえたと思います」。こうしてコンビニハウスの知名度が高まっていく中で、次第に法整備も進むようになったという。「必要だと思ったことを始める。その必



ちょっとした外出も一緒に



楽しい&おいしい、お菓子づくり



ヘルパーの養成講座も開催しています

要性が周りに理解されて、社会的な仕組みが作られる。法整備まで結びつけたボランティア活動は、すごく価値のあることだったと思います」。そして活動開始から約10年後、社会福祉法人としてエゼル福祉会が誕生した。

“人とのつながり”を大切に

ボランティア団体から社会福祉法人へと変化していく中で、大川さんは“人とのつながり”を決して切らない”ことを大切にしてきたと話す。「相容れないものがあっても、どこかでつながっていると必ず助けてもらえるんです」。大川さんはコンビニハウスを始めた当初、新しい制度を作ったり、法人を立ち上げようとは思っていなかった。「とにかく困っている人たちを助けようと思っただけ。その思いに共感する方々とつながり続けていた結果、今があるんです」。

つながりを大切にする姿勢は、地域との関わり方にも深く結びついている。今も昔も、エゼル福祉会の事業は“地域のニーズに応える”ことに主眼を置いている。今後、新しい施設を作る際も、地域の方たちと一緒に考えて決めていくそう。「人が賛同してくれば自然とお金も集まる。特に障害福祉サービスは、お金より人との関係づくりが大切です」。

そして、今のボランティアの方々にも“つながり”を大切にしてほしいと大川さんは話す。「人、団体、地域とつながることで、さまざまな問題やニーズが見えてくると思います。ぜひ一歩を踏み出してほしいですね」。

心に残り続ける2つの言葉

これまでの20年間、大川さんを支えてきた2つの言葉がある。1つは、コンビニハウスの取材に訪れた新聞記者が書いたもの。『人と人は“問題”の

ないところでは出会えません。私たちは“問題”を通して相手に関心を持ち、問題を解決しようと努力する中で、より深く知り合うことができるのです」。大川さんは「だからコンビニハウスの人間関係は濃いんです」と続ける。「深刻な環境で生きている人たちの問題をどうやって解決すればいいか?と、私たちはずっと考えられました。職員と障害者の方の関係はもちろん、職員同士の関係も濃密ですよ」。

もう1つが、大川さんが住んでいる近くの中学校の教頭先生による言葉だ。『自分の子どもだけちゃんと育てようと思っは、いけない。向かいの子や周りの子をちゃんと育てないと、自分の子どもちゃんと育てない』。いくら勉強ができて良い学校に入っても、周りの環境が悪ければそれに影響を受けるもの。これは社会の仕組みを端的に表していると言う。「自分が安心できる社会は必要だけど、自分の周りの障害者も安心できる社会にならないといけない。私は幸せだけど、他にしんどい思いをしている人がいるのは嫌ですね。そう思う人が増えてアクションが起きると、社会はどんどん豊かなものになっていくと思います」。

取材を終えて

エゼル福祉会では現在、12月17日に北区役所講堂で開催されるクリスマスイベントのボランティア募集をしているそうです(詳しくはP8)。興味のある方はぜひ一度連絡してみてください。

Information

社会福祉法人 エゼル福祉会
名古屋市西区中小田井2-431
TEL/FAX:052-505-6082
E-mail:convini@beach.ocn.ne.jp
ホームページ:http://ezeru.sakura.ne.jp



毎年恒例のクリスマス会。抽選のプレゼントはすべて寄付だそうです



バンド演奏が始まると、みんな舞台上で踊り出します